ユネスコスクール
活動事例集

第10集

愛知県

愛知県教育委員会

目　次

特集 愛知県のSDGs達成に向けた取組		2
ユネスコスクール活動事例①	**豊橋市立大崎小学校**	4
ユネスコスクール活動事例②	**豊橋市立飯村小学校**	6
ユネスコスクール活動事例③	**名古屋大学教育学部附属中・高等学校**	8
ユネスコスクール活動事例④	**愛知県立愛知商業高等学校**	10
ユネスコスクール活動事例⑤	**名古屋市立北高等学校**	12
ユネスコスクール活動事例⑥	**名古屋経済大学市邨高等学校**	14
ユネスコスクール活動事例⑦	**中部大学第一高等学校**	16
愛知県ユネスコスクール交流会		18

はじめに

ユネスコスクールは、ESD教育の推進拠点としても位置づけられ、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するために1953（昭和28）年に創設された、①地球規模の問題に対する国連システムの理解、②人権、民主主義の理解と促進、③異文化理解、④環境教育といったテーマについて、質の高い教育を実践する学校です。世界182か国で約11,500校のユネスコスクールがあり、日本国内の加盟校は、1,112校（2023年（令和５年）１月現在）を数えます。愛知県では、2014（平成26）年11月に名古屋市で開催された「持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）に関するユネスコ世界会議」を契機としてユネスコスクールへの加盟が進み、現在申請中・キャンディデートを含め160校が活動し、国内最大規模となっています。

SDGs（持続可能な開発目標：Sustainable Development Goals）は、「誰一人取り残さない」社会の実現を目指して、2030年を期限とする包括的な17の目標及び169のターゲットにより構成され、認知度は年々高まっています。一方、ESDはSDGsの目標４「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」のうちターゲット4.7に位置付けられています。それに加えてESDはSDGsを達成するために必要な質の高い教育に貢献するものとして重要視されています。新学習指導要領の前文及び総則においては、「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられ、各教科指導においてもESDの視点での授業改善が求められています。

愛知県教育委員会では、ユネスコスクールの活動の質的向上と、ユネスコスクール同士の交流を目的とした支援事業を行っています。本年度は、児童・生徒・学生・教員等が交流し、学び合う「ユネスコスクール交流会」を、Aichi Sky Expoにて10月に開催された「SDGs AICHI EXPO 2022」において実施しました。また、ユネスコスクールの教員研修等における講師派遣や、管理職・ESD実践担当者等を対象としたESD・SDGs推進指導者研修会を、オンラインを併用したハイブリッド型で実施しました。

本事例集は、ESD活動に取り組む県内のユネスコスクールの実践をまとめたものです。ユネスコスクール加盟の有無を問わず、全ての学校におけるESDの充実と広がりへとつながり、未来を担う子供たちの学びに向かう力を育むきっかけとなることを願っております。

結びに、本事例集作成にあたり、御協力いただいたユネスコスクールの先生方、及び関係市町村教育委員会を始めとした関係の皆様に心より感謝を申し上げます。

2023（令和５）年３月

愛知県教育委員会

特集 愛知県のSDGs達成に向けた取組

LEAVE NO ONE BEHIND 誰一人取り残さない

SDGsの成り立ち

SDGsができる前にMDGs（Millennium development Goals：ミレニアム開発目標）という前身があるのはご存知でしょうか。2000年９月に、147の国家元首を含む189か国の加盟国代表が、21世紀の国際社会の目標として、より安全で豊かな世界づくりへの協力を約束する「国連ミレニアム宣言」を採択しました。この宣言と1990年代に開催された主要な国際会議やサミットでの開発目標を一つにしたものが「ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals: MDGs）」です。MDGsは国際社会の支援を必要とする課題に対して2015年までに達成するという期限付きの８つの目標、21のターゲット、60の指標を掲げていました。

1 極度の貧困と飢餓の撲滅
2 普遍的な初等教育の達成
3 ジェンダーの平等の推進と女性の地位向上
4 幼児死亡率の引き下げ
5 妊産婦の健康状態の改善
6 HIV/エイズ、マラリア、その他の疫病の蔓延防止
7 環境の持続可能性の確保
8 開発のためのグローバル・パートナーシップの構築

SDGsとは？

SDGsはMDGsに代わる新たな行動計画として定められ、MDGsで未達成だった課題や地球規模で向き合わなければならない新たな課題について、先進国と途上国が共に達成すべき目標とし、169のターゲットとともに構成されています。

誰一人取り残さないようにするために、世界で取り組む17の共通の目標

1 貧困をなくそう
2 飢餓をゼロに
3 すべての人に健康と福祉を
4 質の高い教育をみんなに
5 ジェンダー[※1]平等を実現しよう
6 安全な水とトイレを世界中に
7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに
8 働きがいも経済成長も
9 産業と技術革新の基盤をつくろう
10 人や国の不平等をなくそう
11 住み続けられるまちづくりを
12 つくる責任つかう責任
13 気候変動に具体的な対策を
14 海の豊かさを守ろう
15 陸の豊かさを守ろう
16 平和と公正をすべての人に
17 パートナーシップ[※2]で目標を達成しよう

※1 ジェンダーとは、社会的・文化的な性別のこと。
※2 パートナーシップとは、みんなで力を合わせること。

Sustainable（持続可能な）Development（開発）Goals（目標）

SDGsとは、2015年に国連加盟国によって総会決議された持続可能な17の開発目標のこと。2030年までにこれらの目標の達成を目指しています。

私たちの住むまち

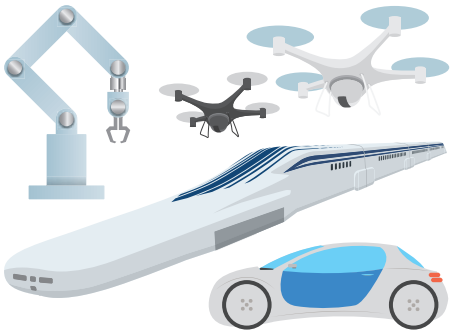
愛知県SDGs未来都市計画について

愛知県が2030年までにさらに住みやすいまちになるための取組

経済・社会・環境の３つの調和がとれた県を目指す

愛知県は、2019年７月に内閣府から、SDGsの達成に向けた優れた取組を実施する「SDGs未来都市」に選ばれました。経済・社会・環境をめぐる幅広い課題に一体的に取り組みながら、すべての県民のみなさんと一緒に持続可能な社会を目指しています。

経済分野



〈SDGsにつながる取組〉

- 近未来技術等の社会実装の推進
- スタートアップ※と既存企業の連携によるイノベーションの創出
- 自動車分野における新事業展開支援
- 「モノづくり×AI・IoT※」をテーマとした大学対抗ハッカソン※の開催

世界をリードする日本一の産業の革新・創造拠点

環境にやさしい未来の自動車や飛行機、ロボットなどの開発に取り組み、世の中を変える新しい技術を持った企業がどんどんと生まれるような地域を実現します。

〈※用語解説〉• スタートアップ：急成長が期待される設立間もない企業のこと　• IoT：さまざまなモノがインターネットにつながること
• ハッカソン：パソコンを活用して新たな製品・サービスの開発を競い合うイベント

社会分野

〈SDGsにつながる取組〉

- 若者の活躍促進
- 女性の活躍促進
- 高齢者の活躍促進
- 障害者の活躍促進
- 外国人の活躍促進

人が輝き、女性や高齢者、障害のある人など、すべての人が活躍する愛知

人口の減少や、高齢者の増加がますます進んでいく中、年齢や性別、障害の有無、国籍などに関わらず、どのような人でも活躍でき、全員で支え合う社会を実現します。

環境分野

〈SDGsにつながる取組〉

- 「あいち地球温暖化防止戦略2030」の推進
- EV・PHV・FCV※の普及促進
- 循環型社会に向けた取組
- 自然との共生に向けた取組
- 行動する「人づくり」

県民みんなで未来へつなぐ「環境首都あいち」

県民のみなさんが、あらゆる場面で環境のことを考えた行動をすることで、安全で快適な暮らしを守り、環境と経済がうまく共存できる地域を実現します。

〈※用語解説〉• EV・PHV・FCV：電気自動車・プラグインハイブリッド車・燃料電池自動車の略

※各分野の目標は愛知県が独自に選定したものです。

環境 国際理解 地域文化 気候変動 生物多様性 防災 エネルギー その他

豊橋市立大崎小学校

創　立：1873年
住　所：〒441-8073 豊橋市大崎町字西里中20-1
連絡先：TEL 0532-25-1720　FAX 0532-44-3062
学級数：8　児童数：163人
H　P：http://www.oosaki-e.toyohashi.ed.jp

社会をよりよくしようとする子どもの育成

はじめに

大崎校区は三河湾の南東側に位置し、校区内の寺（龍源寺）には愛知県指定天然記念物である「お葉付イチョウ」がある。校区の北には梅田川が流れており、魚や鳥などが多く生息している。校区内には多くの農地があり、農業が盛んな地域である。地域の方は学校教育に協力的で、教育ボランティアにも多くの方が参加してくださっている。このような、地域の資源や人材を活用して教育を進めることで、地域の将来を考え、行動できる子どもを育成しようと実践を進めている。

実践内容❶
「大崎HappySmile掃除隊」

ねらい：ごみ問題と自分たちの生活の関わりに気づき、問題解決に向けてすすんで取り組む児童を育てる

春の自然観察に出かけた際に、さまざまな生き物とふれあうことができた。一方で、子どもたちは川沿いに多くのごみが落ちていることに気づき、校区のごみ問題に関心をもったので、ごみ調査を行うことにした。校区の北側は、歩道や川沿いにごみが散乱し、多種多様なごみが見られた。南側は比較的少なかったものの、よく使う公園にごみが落ちていた。調査を通して、公園などの遊びで使う場所にごみが多いことや、自分たちの生活で使われたものばかりが落ちていることがわかり、どうにかしなければならないという思いを強くもった。今回の活動について話し合いをしたところ、「ごみ問題についてくわしく調べる」「梅田川のごみを拾いに行く」という意見が出された。調べ学習では、不注意やポイ捨てによって生まれたごみは、やがて川から海へたどり着き、紫外線を浴びることでマイクロプラスチックとなり、海の生き物の命を脅かすことを知った。ごみ拾いでは、1日で約10kgを拾ったが、まだまだ川にはごみがあり、4年生だけで拾いきれる量ではないことがわかった。そこで、「ごみをつくらない」「ごみを捨てないように呼びかけたい」「ごみを拾いたい」という三つのことを続けていこうという結論に至った。このように、実際に自分が住む町の将来につながっていく解決方法を考えることができた。これからも引き続き実践し、地域の方にも呼びかけていく。

梅田川でごみ拾い・環境調査をする様子

成果

これらの活動を通して、地域のごみの実態や世界のごみ問題には、自分たちの生活が大きく関わっていることを知ることができた。ごみ問題を自分自身の問題としてとらえることができたことによって、すすんで解決しようとする姿が見られた。また、どうしたらよいか自分なりの考えをもつことができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「みんな大好き 大崎のじまんのキャベツ」

ねらい：キャベツ作り体験を軸にした校区と関わる活動を通して、問題を解決する力を高める

大崎校区はキャベツの生産が盛んで、校区の農家の９割がキャベツの栽培を行っている。学級の保護者の中にもキャベツ栽培を行っている農家があり、子どもたちにとってキャベツは身近なものである。

２学期になってから、農家の方からキャベツの種を分けていただき、３年生全員でこれから種をどうしていくかを話し合った。子どもたちは、話し合いの中で「育てて観察したい」「キャベツができたら家族にも食べてもらいたい」などの思いをもち、３年生全員で育てることになった。そして目標とするキャベツを「㊙おおきい㊙もたい㊙さ３年生の㊙れいなキャベツ」と決め、できるだけ自分たちの力で育てていくことを目標にした。キャベツを育てていく中で、１学期に出会った農家の方々に質問したり、作業を見せてもらったりした。特にキャベツ農家の石川さんは、子どもたちにとって、キャベツ作りで困ったことがあったらすぐに聞きに行くことのできる「地域の先生」である。うねのつくり方や水やりの頻度、苗を植える間隔など、さまざまなことを教えていただき、自分たちの栽培活動に生かした。

いちばん問題になったのは、害虫の被害である。毎日観察していると、害虫が葉を食べていることがわかり、「きれいじゃなくなってしまう」という不安の声があがった。そこで、栽培の目標にある「きれい」を達成するために、害虫対策について考えていくことになった。一人調べを経て、どんな対策をしたらよいか話し合う場「キャベキャベ会議」を開いた。話し合いの中では、「３年生だけでできる害虫対策にしないと『おおさきキャベツ』の『３年生の』が守れない」という意見も出された。これは、ただ害虫対策をするだけでなく、初めに決めた目標である「おおさきキャベツ」が念頭にある表れであり、子どもの意識が初めのころの目標とつながっている証しである。害虫対策は、安全性や使いやすさから、自然由来のスプレータイプの防虫剤を使うことになり、害虫対策をしながら栽培を続けることになった。

キャベツの定植体験の様子

今後は、キャベツ作りを始める前に出た「家族に食べてもらいたい」「全校にプレゼントしたい」という思いを実現するにはどうしたらよいか、２月のキャベツの収穫に向けて、キャベキャベ会議で話し合っていく。

石川さんから教わる子どもたち

成 果

体験を重視し、地域の方と関わる活動は、子どもたち一人一人に充実感や満足感をもたせ、自信をもって粘り強く課題に取り組む意欲につながった。そのうえでキャベツ栽培に取り組むことは、自分事としてさまざまな問題をとらえ、問題を解決していく力を伸ばすことにつながった。

おわりに

大崎小学校では、全学年で地域の資源、人材を活用させていただき、授業を展開できている。低学年では校区探検等で校区について新しい発見をし、学年が上がるにつれ、地域と深く関わり、地域のための行動を起こしていくことになる。高学年では自発的な挨拶運動や校区への防災の呼びかけなど、地域や社会をよりよくする活動を積極的に進めており、これからもこのような活動を継続していきたいと考える。

環境　国際理解
地域文化　気候変動
生物多様性　防災
エネルギー　その他

豊橋市立飯村小学校（いむれ）

創　立：1983年
住　所：〒440-0835 豊橋市飯村南四丁目6-4
連絡先：TEL 0532-63-3165　FAX 0532-65-1210
学級数：24　児童数：689人
H　P：http://www.imure-e.toyohashi.ed.jp

よりよく生きようとする子の育成

はじめに

飯村小学校は市内でも児童数の多い大規模校である。また、外国にルーツをもつ児童が多数在籍しているため、さまざまな特性のある仲間との共生を大切にしている。本校では、総合的な学習を「きらめき」とし、3年生では福祉や地域の特産物、4年生では地域のよさと自分自身、5年生では防災、6年生では国際理解について考えることで、よりよく生きようとする姿勢を育成している。地域を大切にし、将来を担っていく気持ちを高められるようにしたいと考え、本主題を設定した。今回は4年生の我ら岩屋緑地探検隊についての実践を紹介する。

実践内容❶
「岩屋緑地に行ってみ隊！もっと聞き隊！」

ねらい：岩屋緑地にある自然や文化財などについて深く知り、その大切さに気づく。

3、4年生のなかよし班遠足で岩屋緑地へ行き、実際に岩屋緑地の豊かな自然や動植物を見た後、学級で感想を出し合った。すると、防空壕についてや、木についている樹木名のプレート、生えているキノコについてなど、さまざまな疑問が出され、岩屋緑地についてもっと知りたいという気持ちが高まった。そこで、「岩屋緑地に親しむ会」の方を講師に招き、岩屋緑地を案内していただいたり、ウォークラリーをして岩屋緑地のことを教えていただいたりした。この活動を通して、子どもたちは、緑地にはたくさんのキノコが生えており、シイタケやナメコも栽培されていること、また、美しい竹林があり、春には桜、秋にはドングリなど季節の自然を楽しめることなどを知り、その自然の豊かさを体感することができた。そして、据え置かれている銅像は、「小渕志ち」であり、地域の養蚕業に多大に貢献したこと、防空壕は戦争の遺産であることなどを知ることで、その文化的価値の高さも感じることができた。加えて、子どもたちは、「親しむ会」の方は、草刈りや腐った木が倒れないように木を伐採するなど、環境を守るさまざまな活動をしていることも知った。そして、それがボランティア活動であることも知り、どうしてここまで岩屋緑地のためにしてくれるのかと疑問をもつことになった。

岩屋緑地でウォークラリー

成　果

体験活動を通して、岩屋緑地のよさに気づき、愛着をもつとともに、さらに知りたいと、個々に追究して調べ学習を進める姿勢が見られた。また、「親しむ会」が緑地保全のためにさまざまな活動を行っていることを知り、感謝の気持ちを感じ、自分たちもやってみたいという意欲をもつ子も見られた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
1 貧困をなくそう　2 飢餓をゼロに　3 すべての人に健康と福祉を　4 質の高い教育をみんなに　5 ジェンダー平等を実現しよう　6 安全な水とトイレを世界中に　7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに

実践内容❷

「岩屋緑地の魅力を広め隊！伝え隊！」

ねらい：地域の財産である「岩屋緑地」を守るために自分でできることを考え実践する。

いむれっ子発表会「我ら岩屋緑地調査隊」

子どもたちは、「岩屋緑地に親しむ会」の方から、活動内容について話を伺うことで、その活動動機について疑問をもった。そこで、「親しむ会」のホームページを調べたり、直接質問したりするなど「親しむ会」の方の思いに迫る活動を行った。子どもたちは、ホームページにあった会の発足記事や桜植樹の記事などから、岩屋緑地を守りたいという思いやよさを広めたいという願いを読み取ることができた。そして、「『親しむ会』の方が、岩屋緑地をがんばって整備していることを伝えたい」「ぼくらも岩屋緑地をみんなが親しめる森にできるように、いいところを伝えたい」という思いをもった。

そこで、学習発表会で岩屋緑地のよさや歴史について発表すること、岩屋緑地の魅力をペア学年の３年生と「親しむ会」の方に伝える機会を設けることにした。

学習発表会では、調べ学習や体験学習でわかった岩屋緑地のよさや文化財のことを劇にして、全校児童や保護者に発表した。そこでは、「鯖弘法大師」や「岩屋観音像」、「小渕志ち（糸徳製紙工場の創始者）」の功績など、一人調べでわかったことを多くの人に伝えることができた。そして、「親しむ会」の方になりきって演じることで、岩屋緑地を大切に思う気持ちやもっとみんなが親しめる森にしたいという気持ちをより高めることができた。

また、岩屋緑地の魅力をペア学年の３年生と「親しむ会」の方に伝えるために、壁新聞を作成した。その際、自然、文化財、「親しむ会」の活動の３つの記事が、どの新聞にも入るようにした。子どもたちは、自分が現地で調べたことやウォークラリーで学んだことに加え、インターネットで調べたことを付け足し、４コマ漫画でまとめたり、写真を用いたりと、さまざまな工夫を凝らし、自分たちの思いが伝わる新聞を作成することができた。こうすることで、岩屋緑地のよさを改めて子ども自身が感じつつ、３年生と「親しむ会」の方に伝えることができた。

３年生から、「遠足で行った岩屋緑地に戦争に関係することが残っているということにびっくりした。」という感想をもらったり、「親しむ会」の方から、「自分たちが教えたこと以上に詳しく、さらに深く調べてくれたことがうれしい。こちらも勉強になった。」などの感想をいただいたりしたことで、子どもたちは大きな自信を得ることとともに、自分たちの校区にある岩屋緑地を今後も守り続けていきたいという思いを強くもつことができた。

３年生への新聞発表

成 果

「親しむ会」の方に話を聞き、思いを知ることで、地域のよさに気づき大切にしていきたいという気持ちや魅力を伝えたいと意欲を高めることができた。特に、「親しむ会」の方への発表では、会の方も知らないことを発表できたので、感心したと褒めていただき、子どもたちの自信やさらなる地域への愛着につながった。

おわりに

岩屋緑地は多くの自然と触れ合うことができる。四季によって山の色は変わり、生き物も変化する。そんな自然が美しく保たれているのは、「親しむ会」の方々のおかげである。子どもたちの中には、山の変化やそのような方々がいることを知らない子も多かっただろう。本実践を通して、自分たちの校区にある岩屋緑地には魅力がたくさんあるということ、そしてその魅力を保つために活動している人がいるということに気づき、地域への愛や誇りをもつことができた。

環境 | **国際理解** | 地域文化 | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

名古屋大学教育学部附属中・高等学校

創　立：1947年
住　所：〒464-8601 名古屋市千種区不老町
連絡先：TEL 052-789-2680　FAX 052-789-2696
学級数：15（中学6 高校9）　生徒数：600人（中学240人 高校360人）
H　P：https://highschl.educa.nagoya-u.ac.jp

オンラインからリアルへの挑戦!!

はじめに

本校は2010年にユネスコスクールの仲間入りをし、本年度で12年目を迎えた。コロナ禍の中、ICT環境が急速に整い、新たなオンラインという国際交流の形が創られた。オンラインでの良さを生かしつつ、リアルでの国際交流も生徒だけでなく教員も切望している。「オンラインからリアルへの挑戦!!」を今年度のテーマに掲げ2022年度ユネスコスクールとしての活動を実践した。実践にあたり「学校外の他者とのつながり」を意識した。先行きの全く見えない今の社会において、草の根的なネットワークを地道に創ることが将来世代への貢献だと考えたからである。

実践内容❶
「カンボジアオンラインスタディーツアー」

ねらい：教育・国際協力の視点から国際理解を深め、アクションに移す。

現地に暮らす人々との交流を通じて、カンボジアが抱える諸課題を学び、コロナ禍において参加者ができることを考えた。また、参加者自らが学んだことをアクションに移し、その取組を学校内外にも発信した。現地との交流１日目は、カンボジアの寺子屋からの中継、学習者自宅訪問（中継）、カンボジア事務所からの中継・意見交換を行った。２日目は他の参加校（計８校）との意見交流・発表（ツアーで学んだこと・事後アクション計画）を行った。参加生徒からは「『私たちの理想の未来』について現地の方と意見交換した際に、現地の方が夢をもってお話していたのが感じられたのが印象的だった」、「ほかの参加校の方たちとツアーで学んだことや、事後アクション計画の発表をしあった時に、自分たちだけでは思いつかないような計画や意見が聞けて刺激を受けることができた。」という声が聞かれた。

事後アクションとして、現地との交流を通じて生徒が考えた「できること」を実行した。カンボジアの教育問題の一つである「学校に来る子どもの数が少ない」という問題を受け、学校を今以上に楽しいと思ってくれる人が増えて、より多くの人が学校に来るようになってほしいという思いから『クメール語での日本の行事紹介の本＆読み聞かせ動画の作成』を行った。クメール語を名古屋大学の学生に習い、制作した本をクメール語で読んでいる動画を現地の寺子屋や、学校に送った。

オンライン交流の様子

成　果

SDGsに関してグローバルな視点で諸課題を捉え、自らが出来ること考えアクションに移す。この過程を通じて、主に教育・国際協力の視点から国際理解を深める機会となり、更に参加生徒が校内外に発信することでこれらの諸課題への関心を拡げることができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「高校生国際会議2022の対面開催」

ねらい：生徒の国際性・協調性・外向き思考を、他国の高校生との議論を通して再構築する。

世界からのメッセージ

日本を含む23か国から46名の高校生が名古屋大学に集結し、SDGs 17のゴールに関して２日間、議論を展開した。基調講演の後、参加者は小グループに別れ、決められたテーマに沿って意見交換を行い、最終日の午後に成果を発表した。各グループに、名古屋大学の留学生が複数人入り高校生の議論をファシリテートした。名古屋大学の留学生を含めると、30か国以上から関係者か集ったこととなった。パワーポイントでの発表が主流になる中、今回は模造紙での発表にこだわった。その理由は、オリジナリティーである。資料や写真等をネットからダウンロードしそれを単に張り付けて発表資料としないことを目指した。視覚的にSDGsをとらえるためピクチャブックを作成して関係者に配布した。参加した高校生には修了証もあわせて配布した。

成 果　すべてのグループで日本人高校生は数的にマイノリティーであった。そこでは日本の高校生がさまざまな国から来ている留学生に交じり英語で議論に参加できるかが問われた。会議が日本国内で行われていることを忘れるかのような空気感であった。

実践内容❸

「アメリカ航空宇宙局（NASA）Senator Bill Nelson氏との交流」

ねらい：壮大なスケールの中でメタ認知的に自己をとらえ、これからの自分の在り方について問い直すこと。

NASA ネルソン長官交流会の様子

附属中学生、高校生全員を対象として実施した。生徒は対面組とオンライン組に分かれて、Senator Bill Nelson氏との交流を実施した。オンライン参加生徒は各教室で同時配信された映像に見入っていた。また、名古屋大学からも総長の他、NASAと共同研究を実施している教員も交流会に参加した。交流会では、Bill Nelson氏から、対面参加の生徒とオンライン参加の生徒に対してメッセージが送られた。その後、活発な質問が、対面参加の生徒からなされた。どの質問に対してもBill Nelson氏は、微笑みをたたえながらも真摯に答えていただいた。Bill Nelson氏の他、NASAから関係者が多く参加したこともあり、対面会場となった本校の交流ホールは、たいへんな熱気に包まれた。

成 果　コロナ禍のため、身近な日常から飛び出し、思いを世界にそして宇宙に巡らせる機会も意識も薄れていた中ではあったが、改めて人類はどこからきて、どこに行こうとしているかについて参加者みんなが考えることにつながった。

おわりに

先が全く見えない不安定な現在だからこそ、世界の若い世代が中心となって「NEW STANDARD」を創造すべき時がきているように感じる。「人の心の中に平和のとりでを築く（ユネスコ憲章前文）」ためにも、私たち教育にかかわる者が中心になってしなければならないことが多くある。すべての生徒たちがかかわることのできるさまざまな体験や経験の場を提供することで、すべての子どもたちが公平・公正に学び体験する機会を得ることができる。自分で考え、自分で探究し、世界の誰一人として取り残さないそんな世界になればうれしい。

環境 | **国際理解** | **地域文化** | 気候変動 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

愛知県立愛知商業高等学校

創　立：1919年
住　所：〒461-0025 名古屋市東区徳川一丁目12番1号
連絡先：TEL 052-935-3480　FAX 052-935-3470
学級数：21　生徒数：775人
H　P：https://aichi-ch.aichi-c.ed.jp/

私たちが世界にできることは何だろう？

はじめに

本校では、卒業後に就職する生徒も多く、社会人として必要な力は何かを考え、授業実践が行われている。社会で活躍する方々をゲスト講師として招き、生徒が生きた知識を直接学べる機会を多く設けている。他企業とのコラボレーションや、販売実習の機会も多く、生徒はビジネスを体験的に学習している。近年はSDGsの理解にも力を入れている。

実践内容❶「フェアトレード商品の販売」

ねらい：フェアトレード商品を販売し、世界に貢献する。

本校１年生と、ソーシャルビジネス企業（INSHUTI）とのコラボレーション授業を実施（実践内容②に詳述）

授業の一環で、有志生徒によるフェアトレード商品の販売実習を実施した。

12月11日、名城公園の宗春街道市（マルシェ）へ出店。INSHUTIが扱う商品を販売した。

販売に向けて、９月より、大阪在住のINSHUTIメンバーとオンライン打ち合わせを実施。マルシェ当日に配布するチラシの作成や、ワークショップ実施の提案などを行った。

マルシェ当日は、９名の有志生徒が販売を体験。自身が作成したチラシを配布し、道行く人を呼びこんだ。高校生ががんばる姿に、足を止めてくれるお客さん。温かい言葉をかけられたり、厳しいご意見をいただくことも。生徒たちはこの一日で大きく成長した。

マルシェで販売する様子

成　果

マルシェ出店は、商品を販売することがけが目的ではない。INSHUTIの活動を知ってもらうことも大きな目的である。名古屋の人々にこの活動を知ってもらうことで、世界に貢献することができた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「ソーシャルビジネスに参加！世界を変える商品開発！」

ねらい：「募金」や「寄付」ではない。国際貢献の「ビジネス」を知り、参加する。

望月氏による講演の様子

今回の授業の大テーマ「私たちが世界にできることは何だろう?」について、当初、生徒たちは、「募金」「貧困国に物をあげる」といった意見が目立った。

このテーマについて探求するため、フェアトレード商品の商品開発、輸入、販売を手掛ける団体「INSHUTI」（インシュティ）とのコラボレーションを実現。代表の望月氏を講師に招いた講演も実施した。

望月氏は、2022年３月にこの団体を立ち上げたばかりであり、販路拡大や、商品開発に課題を感じていた。そこで今回、生徒と共に商品開発をすることになった。

生徒は５名程度のグループをつくり、アフリカの布（キテンゲ）を使用した商品開発に取り組んだ。

はじめて見るキテンゲの柄の派手さに、とまどう生徒たち。INSHUTIスタッフも、若者との感性の違いに驚き、生徒たちの開発する商品への期待が高まった。

商品開発をやってみて、生徒コメントは「ただ自分の欲しい商品を考えるのではなく、社会の人々に望まれる物を生み出すということが、一番の難点だった」「この商品開発で、アフリカの人たちの生活が豊かなものになればいいなと思いながらつくることができた」であった。

12月13日。望月氏を招いての講演では、ルワンダの歴史や現在の様子、望月氏自身が携わった活動について、お話いただいた。

講演を聞いた生徒のコメントは「貧しい人たちと働くのは、支援ではなく、働き手と望月さんが対等な関係なのが、すごくいいなと思った」「これまでは、自分はただの高校生だから、世界で何が起きているのか調べることしかできない、と決めつけていました。でも、今回アフリカの話を聞き、商品開発をして、自分にも知ること以外にできることがあることを学びました」であった。

クラスでのプレゼンテーションの様子

１時間の講演のあと、生徒代表による新商品のプレゼンテーション企画を実施した。各クラスの代表グループが、自慢の商品を熱弁され、望月氏も驚く斬新なアイデアが多く提案された。

生徒全員による投票の結果、「蜜蝋ラップ」が優勝し、商品化に向けて動き出している。商品を制作するのは、ルワンダの女性で、現在、ルワンダで試作をスタートしている。３月に名城公園で行われる「宗春街道市」へ出店予定である。生徒によるチラシの作成も進行中である。

成　果

募金や寄付だけではない、対等につながりながらの途上国支援。生徒はソーシャルビジネスへの理解を深めることができた。また、ビジネスとはただお金を稼ぐことではなく、志の大切さを学ぶことができたのではないか。

おわりに

本校では以前より、企業と連携して商品開発に努めてきた。今年度は全国の商業高校生がプロデュースする“食”の商品コンテスト「第９回商業高校フードグランプリ」において、本校生徒が開発した『きしめんチップス マイルドカレー味』が大賞を受賞した。生徒は、地域との協働はじめ、さまざまな場面で日常的にSDGsに関わる活動をしている。

今回報告させていただいた活動は、１年生全体で取り組んだもので、今後の意識付けとしても非常に有意義だったと感じている。

環境 / 国際理解 / 地域文化 / 気候変動 / 生物多様性 / 防災 / エネルギー / **その他**

名古屋市立北高等学校

北高

創　立：1963年
住　所：〒462-0008 名古屋市北区如来町50番地
連絡先：TEL 052-901-0338　FAX 052-902-1596
学級数：21　生徒数：826人
H　P：https://www.nagoya-c.ed.jp/school/kita-h/

SDGsアクションを起こせる人材の育成

はじめに

本校は2015年度より国際理解コースを開設し、NPOへの活動協力を通して、ESDに積極的に取り組んできた。2018年にユネスコスクールとなり、その活動をホールスクールの取組にしていくために、ユネスコ委員会を立ち上げた。自主的な活動を継続させるために、生徒自身の当事者意識を高める活動から始め、生徒による生徒のための企画を支援している。SDGsの啓発活動や活動実践を通して、生徒達がグローバルイシューに自分事として自発的に取り組める活動を支援している。

実践内容❶「ユネスコスクールとしての活動」

ねらい：生徒がSDGs問題を身近に感じ、問題解決に向けて自ら問いかける力の育成

「国際開発とジェンダー」「SDGsカードゲーム」「JICA中部訪問」「フリー・ザ・チルドレンによるワークショップ」「企業による講演会」「外務省高校講座」「異文化理解講演会」「ICANによる講演会」などを様々な講演会を行った。これらの講演会やワークショップを通し、生徒たちは日本だけでなく世界中で起こっている諸問題について理解を深めた。アフガニスタンでの女性問題や、グローバル社会における国家間の不平等、海外協力隊の活動、貧困と児童労働、幸福に生きるということなど、豊かな経験を持った人たちの話を聞く機会を得た。

自分に何ができるか考える

成　果

日常的にSDGsという言葉を耳にしていても、なかなか自分の生活と結びつけて考えることができなかったが、小さなアクションが地球規模の成果を生み出す第一歩となることを学び、自分たちにできることは何かを考えられるようになった。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷
「ユネスコ委員会の活動」

ねらい：生徒が自ら問題を見つけ、その問題への取組を自ら発案し、実践していく力の育成

生徒会の委員会の一つであるユネスコ委員会では、定例の活動となった「コンタクトレンズ空ケース回収」、「書き損じはがき回収」、「SDGs映画観賞会」、「フェアトレードチョコレート販売」などの活動に加えて、今年は文化祭を利用し、フェアトレード雑貨販売を企画実施した。また、未使用文房具の回収・寄付活動も継続している。回収に関しては近隣の中学校に呼びかけ協力をしてもらい、活動の輪が広がった。

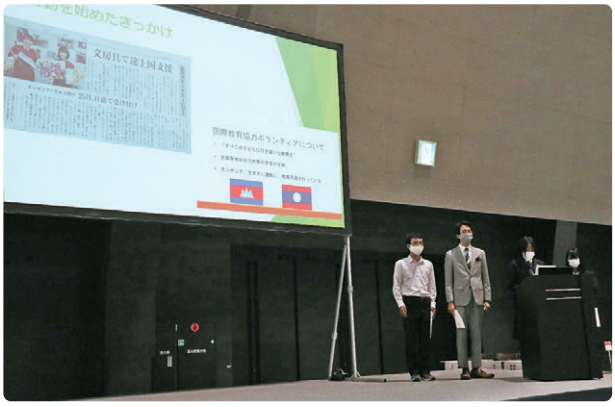
文化祭フェアトレード雑貨販売

成 果　SDGsを学んでも、まだまだ全ての生徒にとって自分事にならず、明らかに主体性という壁があった。しかし、最初は真意が分からず参加していた委員も、徐々に受け身から脱し、必要性を感じ、小さな行動を起こせるようになった。

実践内容❸
「ユネスコスクール交流会に参加して」

ねらい：ユネスコスクールの交流を深め、お互いのプロジェクトから相互に学ぶ

ユネスコスクール交流会に参加し本校のユネスコスクールとしての取組を報告した。例年と違う大きな会場での発表ということで発表生徒はいつもより緊張気味のようではあった。報告内容はユネスコ委員会の設立と、昨年度から本年度までに実践した活動についてで、生徒はパワーポイントスライドの作成や、プレゼンテーションの練習にも余念がなく、発表は成功を収めることができた。当日、数多くの展示ブースを回り、地域の企業や市町村のSDGsへの取組を知った。


ユネスコスクール交流会

成 果　他校の取組だけでなく自分たちの周辺社会の活動を知る機会を持つことができ、様々な気付きや学びを得ることができた。また、大勢の前で発表をすることで問題意識を共有し、自信を持つことにつながり、大きな成長へと結びついた。

おわりに

委員会を発足したことで、自主的な実践活動が増えてきた。啓発のための国際理解講演会と共にユネスコ書き損じはがき回収や、NPO支援の古本回収といった実践や、多団体の活動への参加だけでなく、本校独自の活動となるフェアトレード推進活動も、定例行事として定着しつつある。本校のモットーは「楽しくサステナブルな活動」である。SDGsは、高校時代だけで終わる活動でなく、2030年で終わるわけでもない。楽しさを意義ある活動へ繋ぎ、生涯を通じて世界の問題に目を向けられる視野を、今後も生徒に育んでいきたい。

環境　国際理解　地域文化　気候変動　生物多様性　防災　エネルギー　その他

名古屋経済大学市邨（いちむら）高等学校

創　立：1907年
住　所：〒464-8533 名古屋市千種区北千種3-1-37
連絡先：TEL 052-721-0161　FAX 052-721-1222
学級数：39　生徒数：1,367人
H　P：https://www.ichimura.ed.jp/

国境を超え、協働して取り組む国際貢献活動

はじめに

私たち名古屋経済大学市邨高等学校は、戦争や紛争で自国を追われた難民や、戦争や紛争を起因とした貧困環境で暮らす子どもたちを支援している人々との協働活動を2018年度からはじめ、地域の方々、国内の高校、海外の高校と協働活動に取り組んでいる。特に大切にしていることは、現地の状況を学ぶことである。コロナ禍にあってもICT機器を活用することでリアルタイムに現状を知ることができた。また、現地の状況を全国に届けることができた。

実践内容❶
「シリア・ウクライナ難民の経済的自立を応援したい」

ねらい：現地の情勢を深く学ぶことで
戦争や紛争で自国を追われた人々の自立を応援する。

紛争地域から難民キャンプ等へ逃れた人々も紛争がなければ私たちと同じ生活を送っていた。着の身着のまま自国を追われた人々の経済的自立を支援している林芽衣さんと知り合うことができた私たちは「難民女性の力になりたい!」との思いからフェアトレード活動を始めた。取引（フェアトレード）ができるようなしくみを学んでいる。年に数回、学校内外でチャリティバザーを開催している。林芽衣さんの紹介で東京大学大学院のゼミにオンラインで受講することができ、世界中の難民に対する人道支援の大切さを学んだ。毎年、公開勉強会を開催し、地球市民としてエシカルの考えについて学んでいる。

現状知る生の声聞きたい

名古屋経済大市邨高校（千種区）の生徒有志らが21日夕、ロシアの侵攻が続くウクライナの首都キーウで記者として取材活動をする寺島朋海さん(22)から、ビデオ会議システムで話を聞いた。寺島さんは「ウクライナは日本から8000キロとすごく遠いけど、この戦争のことを知ってもらえたらと思う」と訴えた。（小松原康平）

ウクライナの痛みに思いを寄せて

名経大市邨高生、地元記者とビデオ懇談

戦禍のウクライナの人たちを支援しようと、一部生徒らでつくる「SDGs＝持続可能な開発目標」の有志メンバー4人が6月中旬から、きょう、ボランティアで活動を始めた。それを知った茨城の名古屋市千種区、大山形さんが「遠くの機会になれば」と、寺島さんを講師に6月に開いたオンラインセミナーの「四日目」への参加を呼びかけた。

寺島さんは大阪府出身で大学四年生。2月の侵攻前にロシアの首都モスクワに切り替え、一人暮らしをしていた。侵攻後も「現状を伝えたい」とキーウに残り、地元の英字オンラインメディア「キーウ・インデペンデント」に記事を書いている。

寺島さんは、「ウクライナ」と「ロシア」の歴史を説明した。ロシアの侵攻は、ウクライナの人々にとって「自国の歴史を否定されているようなもの」と話した。

この日は、名古屋大学の大山南研究室の学生有志も参加した。

◇

SDGs市民コンパは、大学生ボランティアの林芽衣さんが、ウクライナでセミナーを開いたことを知り、「遠くの人ごとでなく、いっしょに考えたい」と、オンラインでの参加を呼びかけた。

それでも、「世界の皆さんが戦争のことを忘れないように、国連UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の募金活動を始めました。八十六万三千五百三十六円を、国連UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）に寄付した。

決意を語った。三回の講演を通じて、ウクライナと関連する各国のニュースをさまざまな視点からとらえていきたい」と話した。

◇

寺島さんは、「ウクライナ」と「ロシア」の歴史を説明した。ロシアの侵攻は、ウクライナの人々にとって「自国の歴史を否定されているようなもの」と話した。

この日は、名古屋大学の大山南研究室の学生有志も参加した。

浅野さん（手前）の質問に答える寺島さん＝千種区の名古屋経済大市邨高校で

現状知る生の声聞きたい
（中日新聞 2022, 6・23朝刊）

2022年２月に始まったロシアのウクライナ侵攻に伴って多くの人々が自国を追われた。ウクライナ情勢に詳しい大学教授からロシアとウクライナの歴史について、キーウに滞在しているメディア記者から現地での生活状況をオンラインで学んだ。日本に逃れてきた難民を支援するために街頭募金を実施した。街頭募金は３月２日から毎週土曜日に実施し、６月の世界難民の日まで続けた。募金総額は約85万円を超え、全て難民を支援している国連UNHCRへ寄付した。小さい子どもから若者、お年寄りまで温かい声をかけていただいた。

2023年２月には紛争地域を取材するTBS記者須賀川さんとの対談会を開催し、YouTube配信することで紛争地域で虐げられている人々の現状を報告した。

成　果

パートナーシップ活動を通して、同じ地球の人間として当事者の心に寄り添うことの大切さを学んだ。同じ地球に生きる「地球市民」として戦争を引き起こさないためにも日頃から交流し、お互いを理解し協働活動に取り組むことの大切さを学んだ。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「カンボジア貧困地域の子どもたちの力になりたい」

ねらい：紛争に起因する貧困や教育格差問題について深く学び、子どもたちの力になる。

小学校に寄贈した手洗い場（建設中）

新型コロナが世界中に広がる前の2019年にカンボジア貧困地域の教育格差問題に取り組むNPO法人と知り合うことができた私たちは、同法人が10年前に建設した小学校について対談した際に、家庭の事情で小学生が学校に通えない現実を知った。少しでも学校生活が楽しくなる仕組みづくりとして日本の学校には当たり前にある遊具が現地にはなかったため、遊具を贈るための資金作りとして地域の協力を得て、地元のお祭りに出展、収益金を送った。また現地ではコロナ禍でマスクが手に入らないことを知り、手作りして送った。この取組は学校の枠を超えて日本全国、韓国や台湾などの海外の高校とも協力することができ、２年間で約33,000枚のマスクを集めて送った。2022年の夏は企業とも協力して手洗い場を寄贈した。

成 果

現地に必要な支援を行うためには現地の状況を知ることが大切であることを学んだ。また、活動を行うにあたっては、パートナーシップが重要であることを学んだ。そのために、自分たちが学び続け、校内外へ伝える活動の大切さを学んだ。

実践内容❸

「ICT活用で実現したオンライン学習会・報告会」

ねらい：学習や活動の共有、成果報告の方法としてICT活用はこれからの主流になる。

カンボジアに布マスクを

不織布10枚100円でも…暮らし直撃

新型コロナウイルスからカンボジアの農村部で暮らす人たちを守ろうと、名古屋経済大市邨高校（千種区）の一部生徒でつくる「SDGs有志メンバー」が今年も手作りの布マスクを募っている。現地では新規感染者が急増しているが、経済的理由でマスクの入手が困難という。「少しでも協力してもらえたら」と呼び掛ける。（小松原康平）

カンボジアに布マスクを（中日新聞 2021, 8・21朝刊）

海外との交流にあたってICT機器はとても大切なツールである。本校では新型コロナが蔓延する前から利用していたが、コロナ禍においては欠かすことはできなかった。ICT機器を活用することでシリアやカンボジアだけでなく国内においても遠方の専門家から学んだ。また、成果報告会をオンラインで実施することで会場へ来られない遠方の人たちへも報告することができた。

成 果

おもなICTを活用した活動（2018年から2022年）「高校生によるSDGsグローバル対談」

- カンボジアとのオンライン対談（10回）
- シリアとのオンライン対談（５回）
- 台湾とのオンライン交流（７回）
- 韓国とのオンライン交流（４回）
- 国内の専門家との対談（４回）
- 国連UNHCR学校パートナーズ難民映画祭（３回）

おわりに

ユネスコ憲章の前文にある「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」とあるように、同じ地球に生きる「地球市民」として、かけがえのないこの地球を守っていくためにも、それぞれの国が、平和の尊さを認識するために日頃から交流することの大切さを学んだ。お互いの国の歴史や文化を知り尊重し合うことで、同じ地球市民であることを自覚し、戦争や紛争のない平和な地球の実現に寄与していきたい。今後も、ウェルビーイングに向けた取組を、パートナーシップを通じて継続していきたい。

環境　国際理解　地域文化　気候変動　生物多様性　防災　エネルギー　その他

中部大学第一高等学校

創　立：1938年
住　所：〒470-0101 日進市三本木町細廻間425
連絡先：TEL 0561-73-8111　FAX 0561-73-8031
学級数：37　生徒数：1,251人
H　P：https://www.chubu-ichi.ed.jp/

ACTA NON VERBA（ICT×ESD×探究）

はじめに

本校の建学の精神は「不言実行、あてになる人間〈ACTA NON VERBA〉」であり、ESDを通じて未来を見据える見識と実行力を兼ね備えた人材を育成することを目標としている。本校は、2022年度より「ESD推進部」を校務分掌に位置付け、ユネスコスクールの活動コンセプトを「ICT×ESD×探究」と定めた。また、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力」の３観点を10の「ESD資質能力」として再編し、資質能力の涵養につながる多様な仕組み作りを進めている。

実践内容❶
「ESD探究とESD大賞発表会」

ねらい：探究を通した10のESD資質能力の涵養

2022年度入学生より総合的な探究の時間を見直した。探究テキスト、ワークシート、教員用指導案を本校の活動コンセプトにあわせて開発し、１年生普通科を中心にESD探究を進めている。１年次のテーマは「探究ソロプロジェクト」と「地域探究」である。両テーマにおいて、独自の探究テキストにテーマ設定用フレームワークを定めており、それをもとに各自の探究内容を決定している。個人の探究活動では、特に「興味関心」を尊重する仕組みをとっており、「フィールドワーク（実地調査）」「実験／データ分析」「創作／表現」を含めた形で展開されている。また、テーマ設定が困難な場合は、夏季休業中の「探究アドバイザリーアワー」を利用することで、複数の専門教員から個別指導を受けることができる。今年度設定されたテーマは、人文科学、社会科学、自然科学の多岐の領域に渡る。以下はテーマの一例である。

「高山本線のあり方」
「ディズニーの建築技法とその応用」
「あなたの知らない世界ーお茶文化ー」
「デザイン性と機能性をあわせた付箋の開発」
「梨デザートの開発」

ESD大賞発表会は各団体・個人が発表を行い、探究成果を共有する場となっており、その中で得られるフィードバックは探究の質をさらに向上させている。また、表現力コンテストである「ESD CREATIVE AWARD」を今年度より開催するなど、探究につながる独創性や表現力向上の仕組み作りも行っている。

ESD大賞発表会

成　果

学びの機会や仕組みが多様化したことにより、探究の質が徐々に高まっている。また、表現の場が充実したことで表現力や独創性の高さを示す生徒が増えた。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

実践内容❷

「The First Aroma ―香りの創造―〈ESD部〉」

ねらい：あらゆるSDGs につながる「自然の香り」の抽出と香りを用いた地域の発展

アロマ環境ワークショップ

ESD部は、ライフスタイルの中にある自然の香りに着目し、「香育」活動と香りの抽出実験を進めており、香りを地域ブランド化する試みを行っている。暮らしと香りの関係を地域の小学生や住民と考える「アロマ環境ワークショップ」は、身近な自然の香りを考えながら、アロマクラフトを通じて生活へ香りを取り入れる学びの機会となっている。

地域や学校の香りを開発することを目的に、廃材などから精油を抽出する実験も継続している。今年度は、学内のアロマガーデン整備の過程で伐採した「ヒバ」と、廃棄する「みかん」の果皮から精油の抽出に成功した。抽出した香りのブレンドをモノやコトへの付加価値として応用しながら、学校や地域ブランディングの方法を探っている。

成 果　ワークショップでは地域住民、小学生、高校生の世代を超えた学びの場が実現している。精油の抽出の精度も向上しており、今後の商品開発や香りの地産地消に向けた取組が期待される。

実践内容❸

「ESD国内研修 in 白馬村」

ねらい：SDGsの多様な観点の学びと社会で期待される主体的・協働的に行動できる人材の育成

ESD国内研修 in 白馬村

本校はESDの発展的な学びの場として「ESD研修プログラム（国内／海外）」を設けている。国内研修では、長野県白馬村のSDGsに取り組む企業や村役場を訪問し、高校生が考える企画や提案を発表し議論している。また、各企業の取組も体験する。事前学習から現地研修、事後学習まで、プレゼンテーションとディスカッションを重視しながら探究型ワークショップを進めており、地域の発展を多様な角度から考察する機会となっている。

〈2021年度＆2022年度 研修実施企業一覧〉
(株)大糸　オーブス(株)　昇龍(株)
パタゴニア白馬　八方尾根開発(株)

成 果　ESDに関わる資質能力調査を年度当初と研修終了後に実施した。10の資質能力を調査し、全項目で自己評価の高まりが観察された。

おわりに

ESDの仕組み作りが進むにつれて、生徒の創造性や表現力のさらなる向上がうかがえる。ESDにおける教育開発が生徒個人の可能性や教育活動の新たな地平へとつながっているのは疑う余地がない。次年度は普通科２年次に新たに新設させるグローバル系を中心に国際交流を充実させる。４年ぶりに実施予定のESD海外研修inカンボジアをきっかけに世界への扉を開き、ボーダーレスな学びを加速させる。

本校のユネスコスクールの活動全般については以下の専用ページからも詳細を確認できる。
〈CHUBU１ESD＆ASPnet〉
https://sites.google.com/chubu-ichi.ed.jp/cu1-esd/home

愛知県ユネスコスクール交流会

全国一の規模を誇る愛知県のユネスコスクールの支援とESD（持続可能な開発のための教育）活動の広がりをねらいとして、ESD活動やSDGsに関心のある小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学の、児童、生徒、学生、教職員、行政、団体が集う交流会を開催しました。ESD（持続可能な開発のための教育）活動の紹介を通じて、持続可能な社会づくりの重要性について未来を担う子供たちが学び合いました。ここに集う子供たちの輝く笑顔は、私たちの心にESD活動の大切さと未来への希望を届けてくれました。

「2022年度愛知県ユネスコスクール交流会」は、Aichi Sky Expo（愛知県国際展示場）で2022年10月６日（木）から10月８日（土）まで開催された「SDGs AICHI EXPO 2022」においてプログラムの一つとして実施しました。

日 時　ブース発表：2022年10月６日（木）から2022年10月８日（土）午前10時から午後５時まで
サブステージ発表：2022年10月８日（土）午後１時から午後３時まで

会 場　Aichi Sky Expo（愛知県国際展示場）展示ホールA
※サブステージ発表はWeb会議システム「Zoom」を利用しオンラインでも開催した。

主 催　愛知県教育委員会

後 援　日本ユネスコ国内委員会、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）、中部ESD拠点協議会、ESDコンソーシアム愛知

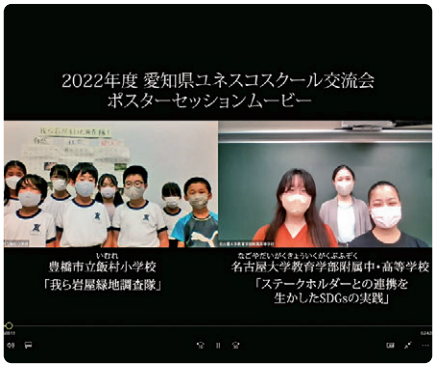
ブース発表　10/6（木）～８（土）

TIME	プログラム
	ポスター展示（５校）
	豊橋市立飯村小学校
	豊橋市立大崎小学校
	中部大学第一高等学校
	名古屋経済大学市邨高等学校
	名古屋大学教育学部附属中・高等学校
終　日	**ポスターセッション・ムービー上映** ２校がお互いに活動発表し、意見交換を行った様子を事前に撮影し、その映像をブースにて上映
	豊橋市立飯村小学校 「我ら岩屋緑地調査隊!」 探検やお話を聞いてわかった、岩屋緑地の調査報告
	名古屋大学教育学部附属中・高等学校 「ステークホルダーとの連携を生かしたSDGsの実践」 生徒のSDGsに関わる活動領域を広げるため、学校外の多様な団体と連携・協力して実施した報告
	忍たま乱太郎パネル展 「忍たまと一緒にSDGsできることからやってみようの段」

ブース発表　10/8(土)

TIME	プログラム
11:00〜11:45	**ポスターセッション①（3校）** **豊橋市立大崎小学校** 「大崎Happy Smile 掃除隊」 自然豊かな町「大崎」からごみを減らし、校区のみんなが笑顔になれる方法を試行錯誤し、実践した活動の報告 **中部大学第一高等学校** 「ESD国内研修 in 白馬村 研修報告」 SDGsに取り組む地域企業や行政へと切り込む機会となった白馬村ESD研修の報告 **名古屋経済大学市邨高等学校** 「未来をつなぐプロジェクト」 校外の専門家や企業から世界情勢を学んで実施した、中東・ウクライナ難民、カンボジア貧困支援活動の報告
12:30〜12:45	**ポスターセッション②（1校）** **豊橋市立大崎小学校**

ポスター展示



ポスターセッションムービー

忍たま乱太郎パネル展

ポスターセッション

ポスターセッション

ポスターセッション

交流会プログラム〈サブステージ〉　10/8(土)

TIME	プログラム
13:00	**開会行事**（主催者挨拶） 愛知県教育委員会 教育管理監　伊藤 尚巳
13:05～14:20	**ユネスコスクール活動発表**
	愛知県立愛知商業高等学校 「ミツバチから広がる地域の輪～持続可能なまちづくりを目指して～」 校舎屋上で養蜂活動を行い、ミツバチを核に地域活性化と持続可能なまちづくりを目指す取組の報告
	名古屋市立北高等学校 「北高ユネスコ委員会の１年間」 北高ユネスコ委員会による昨年度末から取り組んできた活動についての報告
	名古屋経済大学市邨高等学校 「未来をつなぐプロジェクト」 校外の専門家や企業から世界情勢を学んで実施した、中東・ウクライナ難民、カンボジア貧困支援活動の報告
	中部大学第一高等学校 「アロマ環境デザイン」 自然の香りに着目したライフスタイルの改善や香育など地域のアロマ環境デザインに関する活動報告
	名古屋大学教育学部附属中・高等学校 「ステークホルダーとの連携を生かしたSDGsの実践」 生徒のSDGsに関わる活動領域を広げるため、学校外の多様な団体と連携・協力して実施した報告
14:20～15:00	**ディスカッション**（発表者と参加者によるディスカッションなど） アドバイザー：JICA中部 市民参加協力課　江口 由希子 氏 津島市立東小学校 教諭　近藤 勝士 氏

サブステージ・ユネスコスクール活動発表

ディスカッション

ディスカッション

ユネスコスクール活動事例集　第10集

令和5年3月発行

愛知県教育委員会生涯学習課
〒460-8534 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号
電　　話 052-954-6780（ダイヤルイン）
ファックス 052-954-6962